

松原正毅著

『カザフ遊牧民の移動』

—アルタイ山脈からトルコへ 1934

—1953—』

平凡社 2011年 445ページ

おの りょうすけ
小野亮介

はじめに

トルコ共和国は建国以来、多種多様な背景を抱えるトルコ系諸民族の同胞を移民として受け入れてきた。以下に紹介と批評を試みる本書もその副題が示すとおり、19年という長い時間をかけて新疆省から甘肅省、青海省、チベット、カシミール・英領インド（後のインド・パキスタン）を経て、約2万キロメートルにわたる大移動の果てにトルコ共和国に辿り着き、定住するに至ったカザフ遊牧民の移住の跡をたどった大作である。

著者の松原氏は『遊牧の世界』、『遊牧民の肖像』などの名著を世に送り出した日本を代表する遊牧研究者の一人として知られる。あとがきと第1章冒頭によれば、1993年にアルタイ山脈中で著者が実施したカザフ人への聞き取り調査と、その後訪問したイスタンブール西部のカザフ人集住地区カザフ・ケント（Kazak Kenti、カザフの町）での更なる聞き取りが本書の土台となっている。以下、本書の内容を章ごとにかいつまんで紹介しながら書評を加えたい。

I

第1章「新疆から青海へ」では、著者がイスタンブールのカザフ人コミュニティを訪問した際に紹介された大移動の経験者クランバイ・ナズル（Qulanbay Nazir）翁からの聞き取りに基づいて、大移動の始まりが語られる。引き金になったのは雪害と1930年代における新疆地方の動乱であった。中蒙国境間の移動を強く阻止したモンゴル軍の攻撃により、クラ

ンバイが属するアバク・ケレイ（Abaq Kerey）集団ジャンテケイ（Jantekey）部のカザフ遊牧民は、1934年5月にアルタイ山脈東部のチンギル（Qinggil）からジュンガル盆地を南下し、バルクル（Barköl）へ移住した。しかし新疆省主席・盛世才の相次ぐ弾圧を避け、1938年12月には甘肅省に向けて更なる移動を開始する。新疆省政府軍の攻撃によって人員・家畜に損害を出しながらも一行は祁連山脈北麓に落ち着くが、ここでもこの地域を支配する軍閥・馬步芳と対立し、1939年後半から40年にかけて青海省へ南下した。カザフの人びとはおもにサカ（Chaka）周辺で遊牧生活を送るが、大移動の指導者エリスハン（Elisxan Batır）の率いる一集団が1940年8月に馬一族の擁する青海軍の急襲により大打撃を受けるという事件が発生する。この知らせに接したクランバイらの集団は、議論の結果エリスハンの集団へ合流してチベットに逃れることを決め、9月にサカを出発した。著者は、この事件こそがチベットからカシミールを経てトルコに至る大移動の直接的な契機になったと指摘する。

第2章「チベット高原をこえて」ではチベットでの苦難が論じられる。1940年10月初めにアルトゥンチョク（Altenqoke）草原を出発したカザフ遊牧民の集団は崑崙山脈へと南下し、標高4800メートル級の峠越えにとりかかる。カザフの人びとは青海軍の追撃のみならず高山病や食料・燃料不足などの問題にも悩まされるが、退路を断たれた彼らは前進するしかなかった。標高5200メートル級のタングラ（Tanggula）峠を越え、11月初旬にチベット軍偵察隊の監視下に入った一行は、ナクチュ（Nagqu）の手前で移動を阻止され、武装解除を命ぜられて軍の制圧下で収容所生活を送ることになった。しかし12月初旬には監視の目をかいくぐって移動を再開し、カシミールを目指してチャンタン高原を西進する。正確なルートは明らかではないが、一行は約9カ月かけてチャンタン高原を東から西に横断している。

第3章「カシミールでの苦難」で著者はインド政庁文書を駆使し、カシミールでの数々の困難を明らかにしている。チャンタン高原を抜けカシミール国境に至ったカザフの人びとは、1941年10月に国境警備兵との戦闘を経て、降伏と身柄引き渡しの交渉に入る。英領インド政府と協議を重ねたカシミール政府の覚書を精査した著者によると、インド政府の方

針に逆らって、ラダックの地方長官は独断で、武装解除などを条件にカザフの人びとに降伏を認させた。故郷に別れを告げてからここに至るまでに、多くの家族がその成員を失ったばかりでなく、安定的な遊牧生活を送るために必要な家畜をも喪失していた。カザフの移動集団の取り扱いをめぐるカシミール政府とインド政府との間に方針の違いがあったが、結局インド政府の負担によりカシミール西部のムザファラバードに収容所が設けられることになった。同年12月の収容当初に作成されたホーズ(D.G. Harington Hawes)報告と42年1月作成のラドゥロウ(Frank Ludlow)報告を比較すると、衛生状態が悪化したため病死者が続出したにもかかわらず、具体的な対策が取られていなかったことがうかがえる。こうしたなか、事態の打開を図ったエリスハンらは1942年1月に収容所から一時的に脱出し、これをきっかけにムザファラバード収容所での生活は終わりを迎える。

英領インドでの苦難は第4章「印パ分離のなかで」でも語られる。エリスハンらの事件を受けて収容所の北西辺境州への移転が決定されると、1942年5月にカザフの人びとはタルナワ(Tarnawa)収容所へ移動する。しかしここでもマラリアなどの感染症が発生し、彼らは「何度目かの地獄図」(247ページ)に直面した。ここで著者は、カザフ移民問題を検討するため設置されたカザフ委員会の委員モハンマド(Sheikh Khurshaid Mohammad)による報告を活用し、収容所生活の状況や閉鎖後の代替居住地の選定などの様子を克明に追っている。報告によれば、カザフの集団はカシミール入境時に3039人を数えたが、タルナワ収容所が1943年5月に閉鎖されるまでに約1000人を病死により失っている。収容所閉鎖の後、半数弱のグループはインド中央部のボパール(Bhopal)へ移動し、森林地帯での開拓・定住を試みるが、雨季の到来と感染症に悩まされて撤退した。後に大移動についてのもっとも基礎的な文献を著したハリフェ・アルタイ(Xalifa Altay)らは駐カルカッタ中華民国総領事館を訪ね、新疆省への帰還を希望するが、第2次世界大戦末・戦後の状況はそれを許さなかった。一方収容所に残留した集団は北上し遊牧を営もうとするが、ほとんどの家畜を失っていて遊牧生活の再構築はもはや不可能であった。同年9月にエリスハンが病死すると、指導者を失っ

た彼らは分裂し都市部での小商売に従事するようになる。1947年8月にインドとパキスタンが分離独立すると、ムスリムである彼らはパキスタンへの移住を選択した。

第5章「トルコへの移住」ではトルコへの移住の過程とその後の生活が詳細に検討される。1950年になるとトルコ共和国への移住が具体化していくが、その背景にはパキスタンで生活を継続していくうえでの数々の困難があった。本章において著者はトルコ共和国首相府共和国文書館(T.C. Başbakanlık Cumhuriyet Arşivi)所蔵の関連文書を利用し、トルコ側での移住受け入れの問題を詳細に検討している。それによれば、1950年の時点では予算上の問題もあり農務省、財務省、外務省は、その多くがベシャワールに集住していたカザフ難民の受け入れに難色を示していた。しかし旧新疆省連合政府(1946年成立)の幹部で、すでにトルコへ亡命していたブグラ(Mehmet Emin Buğra)、アルプテキン(İsa Yusuf Alptekin)両名の熱心な働きかけや、共和人民党(Cumhuriyet Halk Partisi)から民主党(Demokrat Partisi)への政権交代による政策転換の影響もあり、52年3月の閣議において当時のメンデレス(Adnan Menderes)政権は、政府による手厚い生活保障・優遇措置が適用される「定住移民」(İskânlı Göçmen)としてカザフ難民ら1850人を受け入れることを決定した。1953年9月に必要な書類がカラチに届くと、ハリフェ・アルタイはこの地に留まり渡航のための事務手続きを一手に担った。そして430世帯1379人からなるカザフ難民は14次に分かれてカラチからバスラへ向けて出航し、そこから鉄道を利用しイラク国境を越えてトルコ入国を果たした。イスタンブルの収容所でしばらく暮らしたのち、彼らは1954年夏前後よりコンヤ、カイセリなど政府が用意した土地へ移って新しい生活を始めていくことになる。

移住後の生活について著者がとくに焦点を当てるのは、皮革製造・販売業で成功を収めたマニサ(Manisa)県サリフリ(Salihli)郡クルトゥルシュ(Kurtuluş)地区のケースである。彼らはすでにパキスタンやイスタンブルにおいて手袋や毛皮帽子などを製造・販売していた。ここで著者は中東戦争やキプロス紛争によってギリシャ人、ユダヤ人の皮革業者がトルコから離散し、その空白をカザフ移民が埋

めるようになったと指摘する^(註1)。皮革業が順調な発展を遂げイスタンブルとの関係が深まると、他のカザフ移民もイスタンブルに再移住しこの産業に従事するようになる。それはトルコの村むらでみられた急激な構造的変化とも関係するものであった。

カザフの人びとの大移動を可能とした原動力について著者は、「カザフの人びとが遊牧民であったということにつきて。(中略) 苦難に満ちた移動が遊牧の日常性の延長線上にある」(63～64ページ)、「遊牧における移動は固定的なものではない。(中略) つねに、状況に応じた柔軟な対応がとられている。それだからこそ、前途への不安をかかえながらも未知の領域に踏みこむことが可能になる」(180ページ)と述べ、遊牧生活の日常性が2万キロメートルという非日常的な大移動を可能としたと指摘する。しかし約20年を要した大移動の結果、カザフの人びとは最終的に遊牧を完全に放棄してしまったと著者は結論付ける。絶え間ない移動は遊牧生活の維持に必要な広大な空間の維持を不可能とした。またチベット高原の生態学的条件は牧草の確保を困難なものとし、さらに高山病に絶えず苦しめられた。カシミールで投降した時点ではまだ最低限の遊牧生活の維持が可能であったが、収容所への移動とそこでの生活の長期化はその基盤を根本的に崩壊させてしまった。彼らは1934年に移動を開始して以来、行く先々において多様な政治状況と歴史的な社会変動に直面してきた。著者は彼らが同時代的に共有したものを、ユーラシア遊牧社会が打撃を受けた「近代国家(国民国家)制度の確立にむけた歴史のうねり」(417ページ)だとみている。そして「近代国家制度の確立と遊牧社会の崩壊の風景を時空をこえてみずから確認するものであったかもしれない」(417ページ)と述べ、カザフ遊牧民の大移動を総括している。

II

この大移動とその後の定住生活については、著者が基礎的な文献として依拠したAltay [1998] や Gayretullah [1977] による記録や、Svanberg [1989] などの研究で言及されているほか、日本でもすでに松長 [1996; 2003] がある。以下においてはこれらの史料・研究のなかで本書が占める意義に

ついて述べることにしたい。

歴史学に関心をもつ評者にとってもっとも印象深かったのは、著者が大英図書館所蔵のインド政庁文書およびトルコの首相府共和国文書館所蔵の関連文書を精査し、本書に反映させている点である。従来の研究ではハリフェ・アルタイやクランバイなど移住に加わった人びとの回顧録や経験談に頼るしかなかった。しかし著者は、それに留まらずこうした行政文書を利用することによって、カシミールおよびインド両政府の間で、またトルコでは省レベルでこの問題が検討されていたこと、そして恐らくハリフェ・アルタイら当事者が知りえなかったであろう受け入れ側の詳細な事情を明らかにしている。さらにインド政庁文書に残る数々の報告書・覚書から、部分的な誤認を含みながらも行政側がカザフ移民の状況をかなり正確に把握していたことを実証している。これらの記録により、カシミールでの投降をめぐる経緯や収容所での衛生状況などの詳細が明らかにされたばかりでなく、日付や地名、家畜の頭数などハリフェ・アルタイが記憶違いから記した誤った情報も修正されている。また著者は、当初は自発的な移住を前提とする「自由移民」(Serbest Göçmen)として扱うことを検討していたトルコ政府が最終的に「定住移民」としての移住受け入れを決定した事実に着目する。このことから著者は、政権を獲得した民主党は、ブルガリアのトルコ系住民のように社会主義体制の確立によって排除された同胞を定住移民として受け入れることで社会主義体制への対抗を意思表示した、と当時の世界的情勢の中にカザフ移民に対する取り扱いが変化した背景を見出した。

冒頭でも述べたが、本書は副題が示すとおり1934年にアルタイ山脈の故郷を離れ、1953年にトルコへ移住した集団の移動を主題とした大著である。その一方で、1951年にカシミール入りした後続集団について10数ページしか紙幅が割かれていない点が評者としては気になった。補足として彼らの意義について触れたい。

人民解放軍の新疆省進駐(1949年)により移動を開始したこの後続集団に対し、アメリカは青海省東北部のガス湖(Gas Kōlü)やスリナガルの収容所において、外交官、宣教師、人類学者などさまざまなルートから接触および支援を試みた[Rajpori and Kaul 1954, 26-38, 56-58; Laird 2002, 145-153, 226-

227]。個々の問題の詳細については機会を改めて触れることにしたいが、簡単にいえばアメリカ、とくに国務省はこの後続集団を社会主義陣営に対する「心理戦、政治および諜報活動」の観点から重要視していた [U.S., Dept. of State 1989]。また、スリナガルで彼らを支援した宣教師ラグ (Donald E. Rugh) は1953年8月にトルコから現地の同僚に“mission successful”という文面の電報を送っている [Rajpori and Kaul 1954, 31]。前述のように、移民受け入れの閣議決定以来、1年以上もパキスタンで焦燥の日々を送っていたハリフェ・アルタイらのもとにトルコから必要な書類が届いたのが同年9月であったことを考慮すれば、アメリカが後続集団への接触・支援を通じて先行集団にも関与しようとした可能性は高いと考えられる。

著者は「カザフの移動集団も、第二次世界大戦をふくむ世界情勢の影響を、時間差によるずれをとめないながらも確実にうけている」(131ページ)、「同時代的な世界史の視点からみれば、カザフの移動集団も狂乱の時代の乱気流にまきこまれた一員といってよいだろう」(183ページ)と述べ、カザフ遊牧民の大移動が孤立した事象たりえなかったことを強調する。上述のように、本書ではクランバイらのトルコへの移住を決定づけた間接的要因として当時のトルコの置かれていた時代状況が説明されるが、規模こそ先行集団の10分の1にすぎない後続集団の方が、この問題を冷戦構造の中に位置付けようとする著者の意図に適うものではないかと思われる。そもそもDoğru [2008, 160]によれば、サリフリへの移住自体が後続集団を率いた指導者の希望によるものであった。したがってDoğru [2008, 161-167]の例のように、その後の皮革業への従事と成功が先行集団によってのみではなく、後続集団にも共有されるものであることを強調したい。

いずれにせよ、本書がさまざまな要因が複雑に絡むカザフ遊牧民の大移動を文書資料の活用とインタビューとで明らかにした、現時点でもっとも優れた労作であることに疑いの余地はない。同時に本書が、後続集団の中心にいた人びと [Жаналтай 2000; Çandarlıoğlu 2006; Alptekin 2007]、およびその子弟 [Оралтай 2005; Doğru 2008; Gayretullah 2009] による回顧録やトルコ・カザフスタンでの二次研究などと並んで、カザフスタン、新疆、甘肅、青海、チ

ベット、インド・パキスタン、トルコ、アメリカ、あるいはさまざまなディシプリンを専門とする研究者たちに、先行集団と後続集団とを問わず更なる研究への道を拓く可能性があることを指摘して本書評の結びとしたい。

(注1) ただしギリシャ正教徒・ユダヤ教徒のトルコ国外への移住については、1942~44年に実施されていた「富裕税」制度がすでに非ムスリム商工業者に打撃を与えていたことを強調しておきたい。

文献リスト

<日本語文献>

- 松長昭 1996. 「イスタンブルのカザフ人」『イスラム世界』(46) 17-33.
 —— 2003. 「新疆からイスタンブルに新天地を求めたカザフ人」『アジア遊学』(49) 81-88.

<英語・トルコ語文献>

- Alptekin, İsa Yusuf, Ömer Kul haz. 2007. *İsa Yusuf Alptekin'in Mücadele Hatıraları (1949-1980): Esir Doğu Türkistan İçin-2* [イーサー・ユースフ・アルプキテン闘争回顧録 (1949-1980) —— 隷属の東トルキスタンのために —— 第2巻]. İstanbul: Berikan Yayınları [ベリカン出版].
 Altay, Halife 1998. *Anayurttan Anadolu'ya* [故郷からアナドルへ]. 3. Baskı [第3版]. Ankara: Kültür Bakanlığı [文化省].
 Çandarlıoğlu, Gülçin 2006. *Özgürlük Yolu: Nurgocay Batur'un Anılarıyla Osman Batur* [自由の道 —— スルゴジャイ・パートゥルの回想に基づくオスマン・パートゥル ——]. İstanbul: Doğu Kütüphanesi [東方図書館].
 Doğru, Şirzat 2008. *Türkistan'a Doğru: Türkistan, Türkiye, Kazakistan Arasında Anılar, Düşünceler, Bilgi ve Belgeler* [トルキスタンに向かって —— トルキスタン、トルコ、カザフスタンの間での回想、思想、情報、文書 ——]. İzmir: Arena Matbaacılık [アリーナ印刷].
 Gayretullah, Hızır Bek 1977. *Altaylarda Kanlı Günler* [アル

- タイ山脈における血の日々]. İstanbul: Ahmet Sait Matbaası [アフメト・サイト印刷所].
- Gayretullah, Hızırбек 2009. *Uzamlara Balam* [遠くへ行くのだ, 我が子よ]. İstanbul: Toker Yayınları [トケル出版].
- Laird, Thomas 2002. *Into Tibet: The CIA's First Atomic Spy and His Secret Expedition to Lhasa*. New York: Grove Press.
- Rajpori, Ghulam Mohammad Mir and Manohar Nath Kaul 1954. *Conspiracy in Kashmir*. Srinagar: Social & Political Study Group.
- Svanberg, Ingvar 1989. *Kazak Refugees in Turkey: A Study of Cultural Persistence and Social Change*. Uppsala: Academiae Ubsaliensis.
- U.S., Dept. of State 1989. Records of the Office of Chinese Affairs, 1945-1955. reel 18, frame 579-601, reel 27, frame 216-258(Microfilm).
- <カザフ語文献>
- Жаналтай, Дәлелхан 2000. *Қилы Заман - Қиын Күндер* [困難の時代, 苦しみの日々]. Алматы: Дүниежүзі Қазақтарының Қауымдастығы [世界カザフ人協会].
- Оралтай, Хасан 2005. *Елім-Айлап Өткен Өмір* [祖国のために費やした生涯]. 3-ші басылым [第3版]. Алматы: “Білім” баспасы [知識出版].

(慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程)